

唐代の從軍詩人

田中克己

一 新潮

昭和十九年十月号 第四号 第三頁

支那の歴史を語るときその全盛時代は何時の時代だつたらうかといふことになるが大抵の者は唐代と答へる。これは我々支那史にうといふのだけの考へることではなく、支那人自身もさう考へてゐることは私自身南方で華僑の知識階級と話しして知つた。如何にも唐の版圖は朝鮮半島の百濟高句麗の舊地に及び南は今の佛印のハノイの南、北は外蒙古、西はアラル海にまで及んだのであり、屬國として新羅、吐蕃をはじめ今のタイ族の建てた南詔、滿洲に興つた渤海などを歸服させてゐた。文化的にも當時に及つては世界第一の優秀さを誇り得たことも無論である。

しかし詳細に考へると、版圖の點だけではこの考へ方には疑問がある。元の軍隊が西の方ホーランドにまで侵入し、ワイルズ、タツトの戦に獨波の聯合軍を敗り、イラン方面まで征服し、また南に遠くジャバまで遠征軍を出

し	か	ら	は	唐	代	の	從	軍	詩	人	と	し	て	は	誰	々	不	擧
ぬ	こ	と	と	云	は	ね	ば	な	る	ま	い							
世	に	影	響	を	及	ぼ	し	た	こ	の	な	い	の	は	止	む	を	得
る	塞	外	の	詩	の	優	秀	な	の	と	は	比	較	に	な	ら	ず	後
勝	覽	に	收	め	ら	れ	て	及	ぶ	、	唐	詩	中	に	多	く	見	え
先	で	作	つ	た	詩	は	そ	の	見	聞	と	と	も	に	そ	の	著	星
に	も	從	軍	看	に	賞	信	と	い	ふ	看	る	あ	つ	て	、	ゆ	く
説	で	も	あ	る	ま	い	。明	の	永	樂	帝	の	時	の	南	方	遠	征
と	考	へ	る	の	は	詩	人	で	あ	る	私	一	人	の	我	田	引	水
つ	の	理	由	と	し	て	は	唐	詩	の	お	み	げ	で	は	な	い	か
性	質	に	も	歸	せ	ら	れ	る	か	と	存	じ	ら	れ	る	か	、	今
尙	古	癖	、	物	事	は	昔	ほ	と	よ	か	つ	た	と	考	へ	る	あ
る	。その	理	由	の	一	は	支	那	人	の	性	質	の	一	で	あ	る	。
見	え	る	の	は	我	々	よ	り	し	て	は	不	思	議	な	感	じ	か
の	東	岸	に	ま	で	違	し	た	こ	と	を	彼	等	の	忘	れ	た	如
隊	か	ジ	ヤ	バ	、	ス	マ	ト	ラ	は	勿	論	、	遠	く	ア	ッ	リ
樂	帝	の	頃	に	も	北	は	樺	太	に	遠	征	し	、	南	は	そ	の
か	ら	な	い	の	も	或	ひ	は	當	然	と	云	へ	る	か	、	明	の
し	た	こ	と	の	あ	る	の	と	の	比	較	は	支	那	人	の	云	ひ
																		た

十行 二十字詰

げらハるかと云ふと、王維（摩詰）、高適、
 岑参などかその主なる者であらう。みなその
 名李白杜甫に及ばずとも、唐代の詩人中の錚
 々たるものである。唐代、官吏登傭の法の一
 に進士科があり、この科には玄宗時代から詩
 賦を試みることになつた。このため官吏中に
 詩人かふえたのであり、このことか政治上
 に及ぼした結果は詭か不とも、少くとも唐詩
 の名を後世に傳へしめたと同時に、その詩に
 5つて唐の全盛をい傳へることになつたのは
 、玄宗の目的としなかつたことであらうか、一
 層興味ある。
 王維の從軍は唐の國勢の最も振つた開元年
 向の終り頃、監察御史の職を奉じて、今の甘
 肅寧夏の方面に赴いたのであつて、その時の
 作は集中に數首見え、彼はまた畫人と
 して有名であるが、その陣中の作として、は
 殘るものは、もとより、庠くこと、い、の、比、べ
 こと文學の生命は造型の美術より、永いと云
 はねばなるまい。その作中「使至塞上」とい

十行二十字詰

の戦に打勝つて敵の名王をこころしく打取り
 その頭をこつて天子のみもとに歸り報じま
 っらうと云ふのである。竹里館に幽棲して閑
 寂な詩を自作つて及たのみ知られて及る
 王維に二八らの詩のあることは知る人不少か
 らう。まして末二句に表はれた唐の將兵の意
 氣は從軍の詩人の實見したところであつた。
 こゝにあつたこそ大版圖を拓き得たのである。
 ただ胡笳の聲に悲といふ一字の入つて及るの
 不_レ去_レ擊_レ前_レの情景にややそぐはぬものを感_レいた
 せる不_レ、二の笛の音は唐人すべてに悲しく聞
 えたと見え、さう詠いたのは王維だけでは
 なかつたから強ひて咎めるにも當りまい。
 王維の從軍不_レ西北方、トルコ族の突厥との
 對陣の地であつたのに對し、高適の從軍した
 のは千ベツト族の吐蕃方面であつて、後には
 總指揮官にして軍政方面を兼ねて統べる節
 度使となり、死する前には渤海縣侯の爵を賜
 ひ、死して忠の論を賜はつた。詩人としては
 珍らし、現世的な榮譽を以て得たものと云はね

十行 二十字詰

明	ら	雪	風		借	月	雪	ほ	ま	た	か	ハ	。 詠	珍	詩	ほ
る	連	の	吹		問	明	淨	一	で	故	つ	で	じ	う	を	な
く	ハ	積	一		梅	羞	胡	塞	あ	郷	あ	あ	た	し	作	な
な	ア	つ	夜		花	笛	天	上	ら	の	あ	つ	た	い	つ	な
ま	ア	た	満		何	成	牧	聽	う	こ	あ	て	の	か	た	な
し	ア	み	關		處	樓	馬	吹	か	と	ら	そ	今	が	の	な
こ	ア	ち	山		落	間	還	笛	か	を	の	の	の	五	か	な
の	ア	を			つ		還	し	ら	思	中	中	河	十	十	な
月	ア	原	風		借	月	雪	加	こ	去	年	以	北	歳	の	な
明	ア	住	吹		問	明	淨	佳	ハ	し	後	後	有	の	時	な
の	ア	民	ハ		す	羞	く	い	ハ	て	は	は	方	面	だ	な
下	ア	か	一		梅	管	胡	。	ハ	作	こ	の	面	の	つ	な
彼	ア	馬	夜		花	成	天		ハ	た	の	方	面	の	た	な
等	ア	群	關		い	樓	馬		ハ	ハ	の	面	に	地	と	な
羌	ア	を	山		づ	の	を		ハ	ハ	と	に	見	名	い	な
族	ア	牧	に		ハ	處	牧		ハ	ハ	見	見	え	か	ふ	な
特	ア	地	満		の	に	し		ハ	ハ	育	え	る	か	の	な
	ア	か			處	に	て		ハ	ハ	つ	な	る	こ	こ	な

十行 二十字詰

有	の	笛	の	音	が	聞	え	る	。	そ	の	曲	は	落	梅	花	の	曲	で
あ	る	。	梅	の	咲	く	こ	と	の	な	い	こ	の	寒	地	、	何	處	に
梅	が	落	ち	る	の	か	と	ふ	し	そ	に	思	ふ	が	風	が	吹	い	
て	そ	れ	に	笛	の	音	が	来	り	關	山	一	帯	に	曲	が	ひ	ろ	が
る	の	を	見	れば	、	落	花	紛	々	た	る	思	ひ	が	す	る	、	と	
い	ふ	の	で	あ	る	。	落	梅	花	の	曲	は	こ	と	胡	人	の	曲	で
あ	つ	た	が	、	當	時	は	非	常	に	流	行	し	た	こ	の	と	見	え
つ	、	李	白	に	も	武	昌	の	黃	鶴	樓	で	こ	れ	を	聞	いて	作	
つ	た	詩	が	あ	る	。	梅	花	の	咲	く	故	郷	、	ま	た	こ	の	曲
を	は	じ	め	て	聞	い	た	故	郷	を	懷	ひ	出	し	て	ぬ	る	詩	人
を	考	へ	て	み	て	も	不	可	で	は	あ	る	ま	い	。				
し	か	し	唐	代	の	從	軍	詩	人	の	第	一	人	者	に	推	さ	れ	
る	の	は	岑	參	が	あ	ら	う	。	彼	は	名	家	の	生	れ	で	、	曾
一	族	か	ら	二	人	の	宰	相	を	出	し	た	家	に	生	れ	た	が	、
そ	の	後	家	勢	傾	き	、	父	は	地	方	官	に	止	つ	た	。	天	寶
四	載	、	進	士	に	及	第	す	る	ま	で	に	詩	も	多	く	作	り	、
王	昌	齡	、	李	白	、	杜	甫	と	も	交	は	つ	た	が	、	天	寶	八
載	、	安	西	の	節	度	使	高	仙	芝	に	招	か	れ	て	そ	の	帷	幕
中	に	入	つ	て	み	ら	の	詩	は	そ	の	詩	集	「	岑	嘉	州	集	」
に	多	く	見	え	て	み	ら	支	那	詩	人	中	、	塞	外	の	風	物	を

十行 二十字詰

歌ふことこほい多いのを知らない。しか
 らその詩はみな佳作であるが、唐詩選に載せ
 られた。

君不聞胡笳聲最悲

君聞かずや胡笳の聲は

つと悲しきを

紫髯緑眼胡人吹

紫髯緑眼の胡人吹く

吹之一曲猶未了

これを吹いて一曲をほ

未だ了らざるに

愁殺樓蘭征戎兒

愁殺す樓蘭征戎の兒

涼秋八月蕭關道

涼秋八月蕭關の道

北風吹斷天山草

北風吹斷す天山の草

崑崙山南月欲斜

崑崙山南 月斜のなり

人と欲す

胡人向月吹胡笳

胡人 月に向つて胡笳

を吹く。

胡笳怨兮將送君

胡笳の怨を以て君を送

らんとす

秦山遙望隴山雲

秦山はるかに望む隴山

の雲。

邊城夜夜多愁夢

邊城は夜夜に愁夢多し

向月胡笳誰喜聞。

月に向つて胡笳は誰か
聞くを喜ばん。

No. 9
この「胡笳歌」は彼の從軍に先立つて西方に
赴く顔真卿送別の歌であつて、その赴く西方
の風物地名を點綴しなかりし、その聲の悲し
い胡笳を中心として別れの悲しさを歌つてぬ
るとされ、彼の詩の中で最も愛誦された一
である。しかし顔真卿は書に巧みであつたほ
かりでなく、後に安祿山の亂を起すと、所在
の將士、官吏みな逃れるばかりでなす所な
ら

No.
つたのに對し、玄宗皇帝の「河北二十四郡あ
に一忠臣なかりんや」との言に應ずる如く、
從兄顔果卿とこれに義兵を擧げ、賊軍の後方
を懸念せしめた義士である。公務を帯びて赴
くと人を送る詩としては弱きにすまふかのやう
に誤解されるが、この詩に正解を與へられ
たの如く森槐南博士であつて、末句の解釋
を誰しも月明りの下聞くと喜ばない胡笳を聞
くことを辭せ下に、王事のために赴く卿ます
天下勞を盡さしよとの意とされた。これは支

那人の誰一人として到達し得なかつた正解であつて、詩の玉つかしさを教へるとともに伊藤博文公の詩歌の友として終始知己を得るに、そのハルビン遭難の際傍らにあつて重傷を負はれた博士の詩心を知らしめるに足るにとである。

岑参の従軍は顔真卿にみくはるにと約十年であつたが、その赴いたのは、ホつと西方で高仙芝の軍の本據だつた安西都護府に赴いた。その所在地は龜兹いまの新疆省庫車である。

唐のはじめからここは西突厥経略の據點となつてゐたが、その七人だ後は西域經營の中心地となり、軍政の要員も多く必要であつたに相違ない。

赴く途中隴山を越える頃には

西向輪臺萬里餘 西のかた輪臺に向ふ萬里

餘

也知郷信日應疎 また知る郷信の日にまた

に疎なるべきを

隴山鸚鵡能言語 隴山の鸚鵡は言語を能く

廿行 廿字詰

爲報家人數寄書。

す
ために家人に報せよしほ

しほ書を寄せよと。

陣中、故郷の便しを最に楽しみにするのは古今同じことである。隴山の鸚鵡を捉へ來つたところ、巧みさ不同はれる。

しかし安西ではその風物も詩人を樂しませることゝ多かつた。また諸將との交誼も多^く故郷を思ふことは多いな^らに歸^りたいとは云はない。かうして三年も經過し、天寶十載に

は高仙芝の轉任に伴つて、武威まで歸つて來た。武威は今の甘肅省である。折しは西方から飛報もあつて、高仙芝等の力^で歸附した中央アジアの諸國の離反を傳へて來た。その理由はサラセン帝國の大軍もこの方面に迫つたからである。回教の祖マホメットを建國者とするサラセン帝國は當時全盛、西はスペインまでその手に收め、餘威は東に迫つて中央アジアに及んだのである。高仙芝等の將兵は急遽出動する。岑參等は武威に止つて兵站のこ

甘行 甘字語

とに當つたと思はれる。

唐とサラセンの西域の覇權を賭けた一戦はこの年五月タラスで行はれた。今の蘇聯カザク共和国のアウリエアタの地である。この戦に高仙芝の軍は軍中のカルルク部の者不敵に内應したため敗れ數萬の損傷を出した。これより中央アジアはサラセン帝國の治下に服した。この方面は回疆となつたのはこの戦の結果であるから、世界史上にも重大な戦であつた。峇參にはこの戦を敘する作もなく、

とより敗戦を憤る詩も見えない。天山以東にはサラセン軍の來る恐れもなかつたので、唐人にとつてはただの轉進にすぎなかつたかも知れぬ。しかし今一つこの戦争に關係して興味のあることは、此時捕虜になつた唐人の中に製紙の工人がゐて、これが西方に紙の傳はつたはじめだつたことは、桑原隲藏博士の説かいた。西洋ではこれまで紙は茅草で作つた紙か羊皮紙以外は知らなかつたので、桑・楮などの木皮で紙の出來ることを東洋に教はつ

たのである。紙も兵器の言ある今日、残念な
 かも知れない。序でなから念のため桑原先生の受賣りをす
 ると、東洋人の発明した中、主なるは
 の四、即ち紙の外、印刷、羅針盤、火薬及び
 火である。又至今の時局に必要なるは、
 流星弾は、知らず、電波探知器は、我々八
 木博士の発明になつたとか、東洋人に発明の
 力があるとは申せぬ。要はその利用と發達の
 力である。科學戰の今日、我々も緊禪一番、

詩を止め、新兵器の發明をした。この思ひ
 に驅られ、
 岑參はタラスの戰のすんだ後、長安に歸つ
 て来た。李白は山東、江南に去つてゐない。知
 杜甫や顔真卿は、
 杜甫や顔真卿は、
 と見える。天寶十三載、年四十の時、また北
 庭都護封常清の招きに応じて幕僚となり、輪
 臺、北庭の二地を往來した。いづれも今の新
 疆省の地である。

二度目の従軍の詩も多い。その中の「趙將
軍歌」は陣中の生活の一端を想はせる。

九月天山風似刀 九月天山 風は刀に似

たり

城南獵馬縮寒毛 城南の獵馬 寒毛を縮む

將軍縱博場場勝 將軍 博を縱ほしにし場場勝

つ

賭得將軍貂鼠袍。賭け得たり將軍の貂鼠袍。

天山より吹き下す寒風には馬も毛を縮めるの

下あるか、將士の意氣は壯人に、陣中の閑暇

に賭博を以てあそんでゐる。(恐らく雙六の

たぐひであつたらう。)趙將軍は勝ちつづけて

得意、とうだみ前たちの弱さと、これを賭

けてやうと云つて貴重なる貂鼠の長上衣をは

うり去して闘志を唆つたといふのである。

この詩の示す如く唐の西方軍の意氣は昂か

つたか、残念なかり、後方はさうではなかつ

た。帝都長安の遊惰の氣風は叛志のあつた安

祿山の乗取るところとなり、遂に玄宗皇帝以

下宮廷は成都に蒙塵し、長安は賊軍の手に委

ねらうた。この間、岑参は相變り下西方に留
 まつてゐたが、長安回復のころには歸還した
 。長安に残した家族、家産は安全だったか、一
 向きの詩集には現はれてゐない。それは彼の
 性質が杜甫白樂天と異り、悲歌慷慨を好まな
 かつたためではなから思はれ、從軍詩人と
 しての適格を思はしめる。

翻つて考へると今次大東亞戦争には詩人の
 從軍したものが多く、中でも瓜哇方面に赴い
 た大木惇夫氏の詩集「海原」にありて歌へる

の如きは、從軍を待つてはじめて歌はれる能
 の傑作を盛つてゐる。しかし専門の詩人のみ
 ならず、將兵の作にもその功業とものに後世
 に傳へたいものが多い。軍神や玉碎部隊の將
 兵の作の一二は新聞雜誌に傳はつたが、その
 外にも録すべきものは多からう。私個人の經
 験でも陣中新聞に載つてゐるので覺えた手島
 一等兵の

大君の命としあうば空のはて海のはて
 までわかれはゆくなり

廿行 廿字詰

の歌あいまもつて忘れられぬ。スマトラの配
 屬部隊でも毎月一回、忙い軍務の餘暇に俳
 句の會を催されてゐた。それを指導してゐた
 遠原軍曹は馬來軍の將兵が好んで歌ふ「遺骨
 を抱いて」といふ歌の作者である。戦闘下に
 詩歌は不用であることは自ら明らかであるが
 、戰爭中は詩歌不用の説には大反對。東洋人
 の發明になる紙も不足、印刷の人力も不足は
 もとより不平を云ふべきことではなから、將
 兵の功業を録するための紙帛、將兵の詩歌を

ととめるための印刷だけは確保してほしいと
 思ふ。將兵の詩歌は唐代といはす古今東西の
 文學史に多く見ない。その集い方は皇軍の特
 殊性をも明らかにし得ると思ふ。